囚われる人

ENTANGLED

志茂　浩和　　芸術工学教育センター　教授

Hiroyasu SHIMO　　Center for Art and Design Education, Professor

要旨

六本木アートナイト 2019 に出品した作品「囚われる人」について、準備から展示に至るまでのプロセスを報告する。「囚われる人」は、自動販売機に人が押し込められているように見える映像インスタレーションである。実際には、鉄製フレームにより構成されるケースに PC と 2 台の 43 インチ液晶 TV、TV 前面にポリカーボネイトハモニカボードを組み込んだ装置にスタジオで撮影した映像を送出しているに過ぎない。しかし、撮影時の工夫と装置の構造を組み合わせることで、あたかもすりガラスの向こう側に人が存在するかに錯覚する効果を得ることができる。この装置を街中の自動販売機と並置することで、貨幣経済に生きる私たちを俯瞰できる機会を設けることができるのではないかと考えた。私たちは自分の時間、すなわち寿命を切り売りすることで生計を立てている。人はその中で様々な選択を繰り返し生きていて、ともすると振り回される。しかし、世界に目を向ければ選択の余地のない人々があり、劣悪な環境に生きる人がいる。信じがたいことだが、ネット上には、金銭で売買される子供たちや臓器売買の悲劇が多数報告されている。「囚われる人」は、目新しい実在感豊かな表現で目を引くが、自動販売機を貨幣経済を俯瞰するためのフレームとして捉え、少なくとも自覚を促すことを目的とした作品である。

Summary

This is a report on the entire process of creation of “Entangled”, an artwork exhibited at Roppongi Art Night 2019. “Entangled” is a video installation in which people look as if they are trapped into a vending machine. It a projection of studio-filmed videos played on two 43 inch LCDs with polycarbonate boards attached, all cased in a steel frame case. Filming techniques and the unique construction of the projection device creates the illusion of real people being behind a frosted glass. The objective was to offer an opportunity to recognize the broad conception of people living in a monetized economy. We all make our living by selling our time, which in essence is selling small bits and pieces of our lives for money. Life is about continuous and repetitive decision-making which at times unfortunately end up throwing ourselves around.

However, there are people in the world who don’t have the governance to make their own decisions, such as children in human trafficking or victims of tragic organ trades. “Entangled” is not just an eye-catcher with its new type of realistic presence, but an artwork that looks at vending machines as a frame through which we can view ourselves living in a monetized economy.

図1：「囚われる人」展示状況
全画面に等身大で人物が映る場面と自動販売機を模したメニュー画面に切り替わる。

■はじめに

「囚われる人」（図1）は、六本木アートナイト2019（以下、RAN2019と略す）出品作である。自動販売機を現代の貨幣経済に生きる私たちを俯瞰するためのフレームとして提示した。撮影上の工夫と装置の構造により、あたかも箱の中に人間が存在するかのように見えるギミックが特徴であり、ツイッター等で大きな話題を呼んだ。しかし、実現までの道筋は決して平たんではなかった。本稿では、着想から実現までの経緯を報告する。

■企画の前提

「囚われる人」最大の特徴と言える人の実在感は、2018年六甲ミーツ・アート芸術散歩2018にて出品した作品「向き合う人」にて発見した手法である。RAN2019のための企画を練るにあたり、まずはこの特徴的な技法を用いることを前提として考案した。六甲ミーツ・アートでの展示では、展示の条件が悪く、まとまった観客数が来場するということもないので手応えが薄かった。そのため、改めて世に問いたい思いがあった。

図2：完成予想図

3DCG で再現した装置の完成予想図を六本木の候補地で取材した写真と合成した図である。実際の展示を撮影した（図 1）と比較するとキャスト撮影時のライティングが異なるほかは的確に再現できている。結局、この候補地での提案は建物の問題で実現しなかった。この他に区画整理の影響で実現できなかった青い自動販売機、実現することができた白い自動販売機、合わせて 3 点の完成予想図を中心に企画書を作成した。

■題材

2018 年 12 月、六本木界隈を散策しながら「人が押し込められるべき場所」を探した。ほどなく自動販売機が数多く設置されていることに気付く。そこに人の姿を想像すると、自動販売機が貨幣経済に生きる私たちを象徴的に描き出すフレームになるのではないかという想を得た。自動販売機に並置するならば、屋外で映像作品を展示する際に問題になる電源供給にも対応できそうだ。比較的短時間で内容と実現性を兼ね備えた題材を決定することができた。

■完成予想図

最終的に設置場所を決定するには、自動販売機の権利者との交渉があり、希望通りにいかない可能性もあるが、暫定的であっても場所を特定しなくては完成予想図も制作できないため、六本木界隈を大きく囲む 3 か所の候補地選定後、写真撮影し 3DCG で制作した作品と合成した完成予想図（図 2）を制作し予算案とともに企画書をまとめた。企画は実行委員会の評価を得、およそ 145 万円の予算で制作する運びとなった。

図3：撮影状況
写真スタジオでのオフショット。パーティション用フィルムを貼付したアクリル板越しに撮影している。

■コンセプト

自動販売機に並置した装置に実在感豊かに人間が表現されれば、人によっては人身売買などという言葉も思い描くだろう。考えてみれば貨幣経済に生きる者は、嫌な言い方をすれば寿命を切り売りしているようなものでもある。そこまで遡って問題視するつもりはないが、文字通り売買される子供たちが存在し、内臓を切り売りされる悲劇があると伝えられることを地続きの問題であることは認識すべきだろうと考えた。

■撮影

撮影は、特殊フィルムを貼付したアクリル板越しに行う（図3）。コンセプトに基づき、多様なキャストを招き効果的なライティングを計画し撮影を進めることとした。キャスト（図4）は、神戸芸術工科大学教職員に依頼しスケジュールを合わせながら順次撮影を実施した。また、Facebookを通して学外からの参加を募集し、ご夫婦と親子それぞれ一組に協力を得た。親密なコミュニケーションを心掛け、貴重な映像を得ることができた。

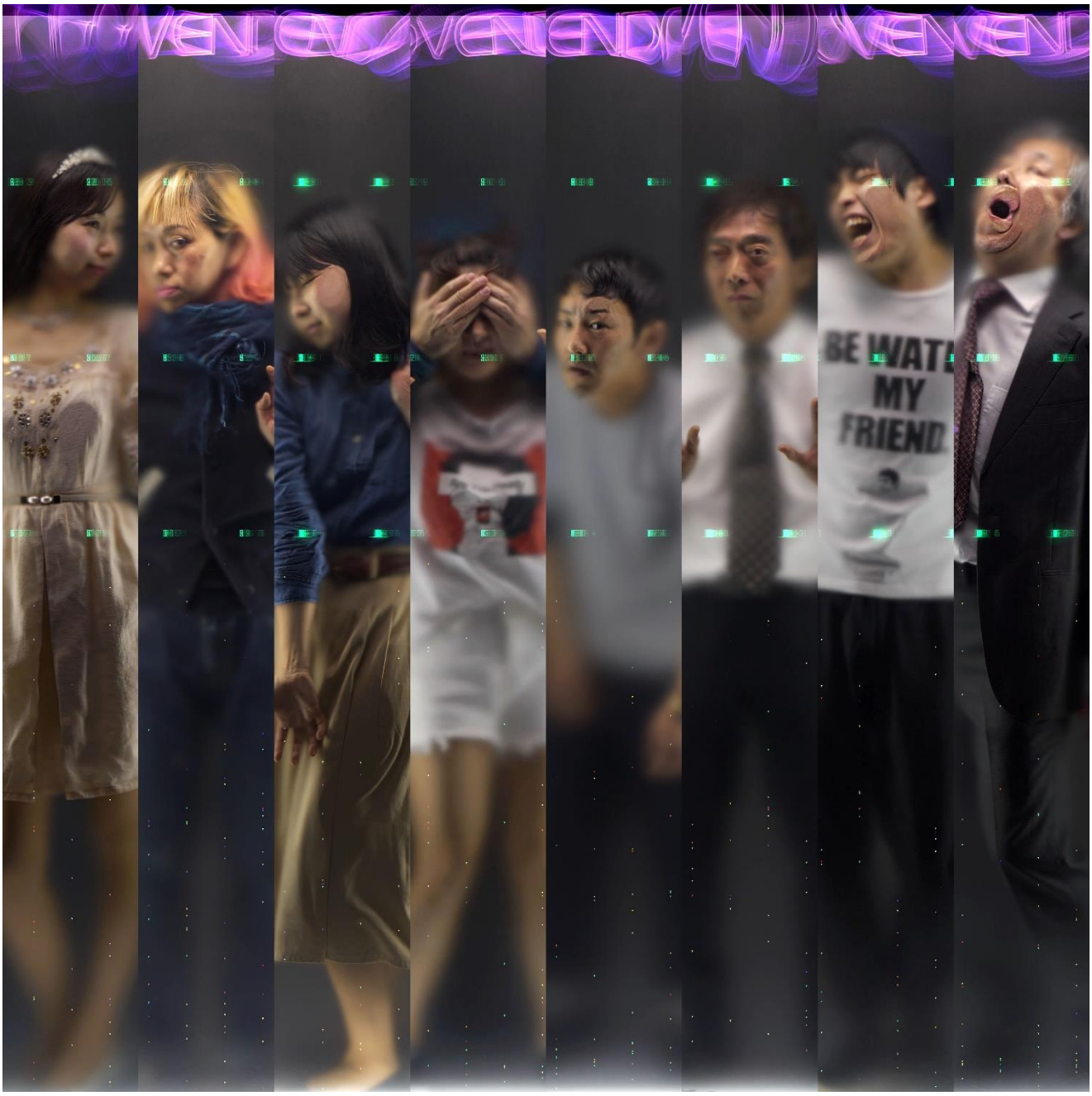

図4：演出
人柄に応じて様々な演出をしている（ポリカーボネイトを通さない状態）。

■演出

キャストにはまず作品の主旨を説明し、セットの仕組みとあらかじめ用意した映像を見せることでどのような結果になるかを提示した。そのうえで、それぞれの人柄を把握することに努め撮影を進めた。あらかじめ欲しい映像の方向性はあるが、無理強いをしても良い結果は得られない。多くの場合、ある程度の方針を決め、筆者が撮影操作をしながら声をかけタイミングを把握していただいた。例えば「はじめはショーウインドウを楽し気に覗く雰囲気、途中から背後に抑圧を感じ押し付けられる」という方針で録画を開始し「今は楽しく見ています」から始まり「はい、抑圧されます」などと指示をする。キャストは、それに応じて演じる(図4)。人柄によってほとんど動かない静的な人もあれば、逆に動的な激しいアクションを依頼する場合もある。また、多くの場合、小さなストーリーを設定している。登場後、途中から状況が変化してゆく。キャストの方々の表現力に驚かされる場面も多かった。

図5： 被写界深度の浅い映像
アクリル板から離れるほど像はボケる。人柄を際立たせる効果もある（ポリカーボネイトを通さない状態）。

■映像の特徴

本作品の大きな特徴は、映像でありながら人間の実在感を表現できている点にある。株式会社中川ケミカル社製フォグラス（パーティション効果を得るためのカッティングシート）を貼付したアクリル板越しに撮影することで、被写界深度の浅い映像(図 5)を得ることができる。アクリル板に接していれば鮮明に像を結ぶが、少し離れると大きく拡散しボケる。そのため、奥行きが感じられる。とはいえ、そのままの状態で TV で再生しても当然ながら映像であることが明確である。しかし、画面前面 70mm ほど離れた距離にポリカーボネイトハモニカボードを設置すると映像であることが判別し難くなり画面までの距離も曖昧になる。スリットとの対比で素通しに見える部分の鮮明さが増す。これらの相乗効果により板越しに人物が実在するかに見える(図 6)。展示現場で鑑賞者の様子を観察したが、はじめから映像と決めてかかるような人はいない。接近して覗き込んで尚、真贋の確信を持てない人もみられた。

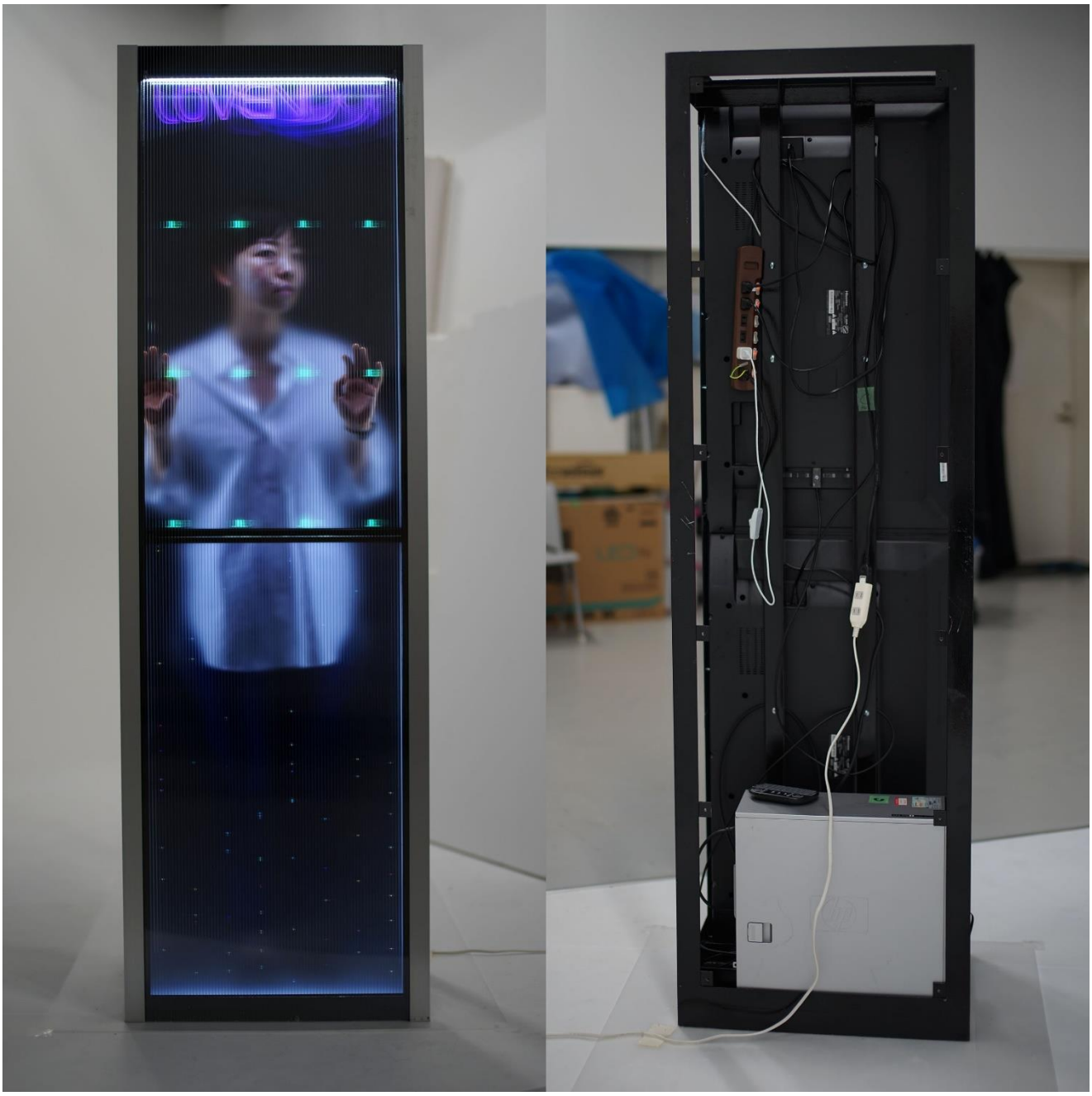

図 6：筐体構造
液晶テレビに合わせて 5cm 幅の鉄製アングルを溶接で繋いだシンプルな構造。

■筐体構造

作品を支える構造（図 6）は、5cm 幅の鉄製アングルを溶接して組み立てたものである。筆者には、設備・技術がないため、神戸ビエンナーレ 2015 以来のパートナーであるコンテナ製造業株式会社アンドに制作を依頼した。当初、既存の自動販売機に似せた筐体デザイン案もあったが、業界最大手である富士電機に問い合わせ、自動販売機に関する調査を実施し、パーツの購入なども検討したが、機能もしないダミーを取り付けるのは蛇足だと判断した。そもそも一般的な消費者の視点から考えた場合、煌々と輝くメインウインドウだけが重要だろう。そこで、フレームは最低限の構造のみとし、自動販売機らしさは映像のみで表現することとした。カラーリングも企画段階で隣接するものに合わせる予定だったが、権利者との交渉が意外にも難航し、最終的な設置場所が定まらない。また、長いゴールデンウィークを挟むなど時間に猶予がなくなったため、フレームは黒とし、ポリカーボネイトにアルミアングルを被せて装着するデザインとした。

図 7：メニュー画面

企画段階では、並置する自動販売機と同色にすることで紛れ込ませる表現を考えたが、設置場所確定の遅れなどから筐体色を決定できないなどの事情もあり、自動販売機を模したメニュー画面を追加した。本編映像を縮小した人物像も小さいなりの実在感がある。これを押そうとする人も多かった。その他に自動販売機らしさを「それとなく」演出する複数のモーショングラフィックス的アニメーションが重ねられている。

■画面デザイン・音楽・編集

メニュー画面（図 7）には、本編に用いる映像を縮小して並べる。小さくても存在感があり可愛らしい。この編集には本編同様 VEGAS を用いている。既存の自動販売機のメニュー画面には、価格や商標などが明記されているが、人間の価格を示せるはずもないので、数字がランダムに変化するアニメーションを用い、架空の商標「LOVENDER」を移ろうようなアニメーションとして、炭酸飲料をイメージしたベースアニメーションの上に重ねた。

音楽は、雑踏の中でも埋もれず、かといって意味もなくうるさくないものとしてモールス信号をベースとしたものを考案した。「私の声は届かない」という意味の日本語と英語を、それぞれモールス信号に翻訳する Web サービスを用い、そこで得た記号を音符として MIDI で打ち込んだものをサイン波で鳴らし、シンセサイザーの音色とタイミングだけをずらして重ねた。この音楽のタイミングを手掛かりに 3 か所それぞれの場所に合わせた映像プログラム「愛」「葛藤」「暴力」を構成した。

図8：鑑賞者の様子
ツイッターで話題となり多くの人が楽しそうに鑑賞した。「面白い」という声が聞こえる反面、「怖い」という意見も少なくなかった。

■展示

RAN2019は、5月25日(土)～26日(日)に開催された。展示作業は前日の5月24日(金)夕方から実施した。大学で制作した装置3台を小型貨物車に積み込み東京まで運搬した。基本的には現場に設置し、PCを組み込み電源を入れるだけなので展示作業はすぐに終了した。撤去も商業施設の終了を待って行ったので、実質的には24日の夕方から26日夜までの展示となった。

■評価

展示をしていると鑑賞者の反応が気にかかる。楽しそうに作品を鑑賞している姿（図8）を見るのは単純にうれしいものである。「面白い」という意見も多い中、「怖い」という意見も多く聞こえた。リアルに見えて生身の人間とは違う動作に不気味さを感じてのことだろう。時間帯により観客数は変動したが、大きな話題を呼び、ツイッターの検索ワード13位にのぼった。

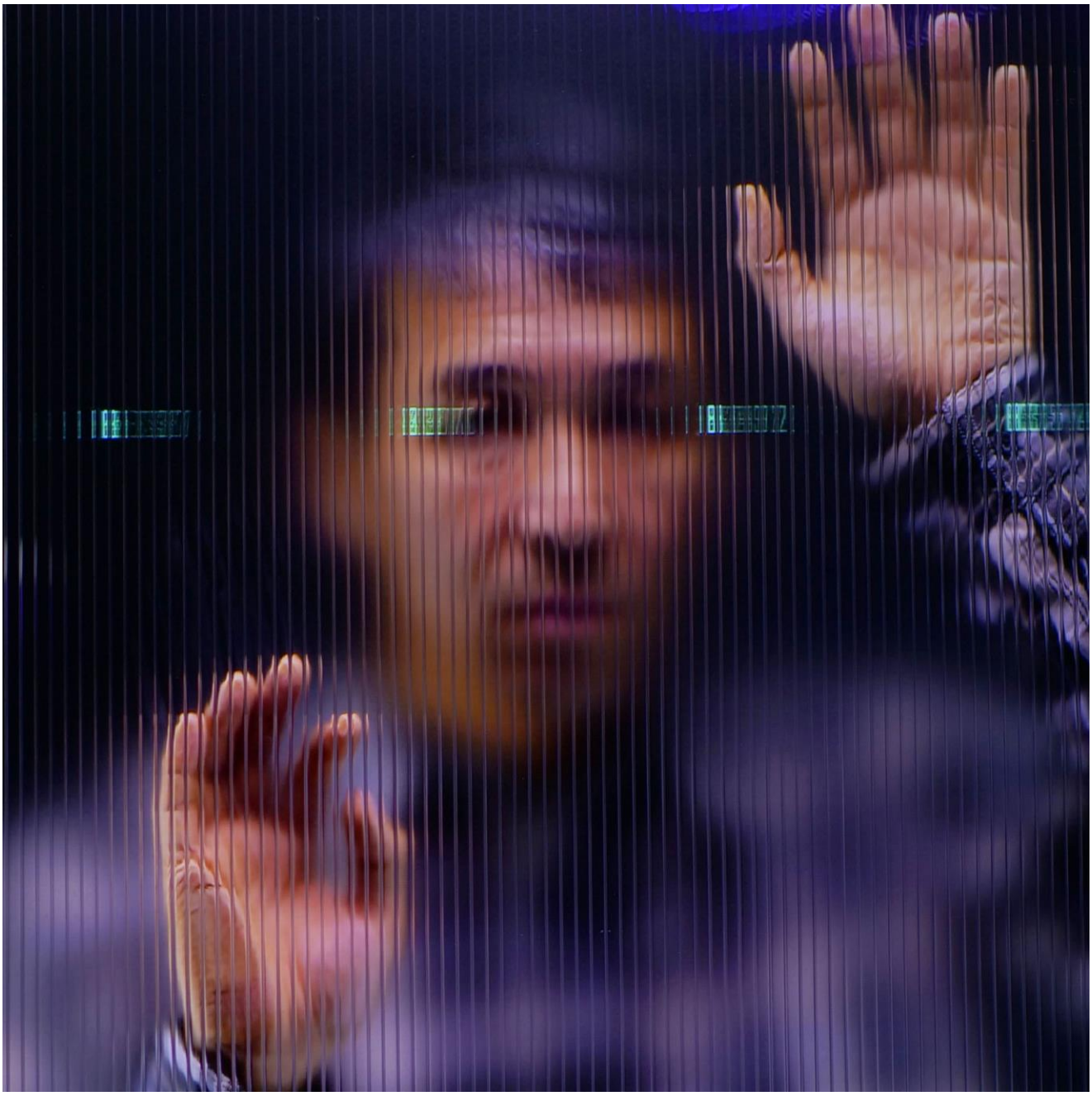

図9：ポリカーボネイトハモニカボード越しの映像

■考察

撮影を続けるうちに様々なことを考えた。撮影方法が特殊であるため、キャストには顔・手をできるだけアクリル板に接するように指示している(図9)。接する部分がなければ単なるピンボケ映像になってしまうからだ。しかし、どんな行動にも動機があり、接するにはそれなりの理由が必要だ。好奇心を持って覗きこもうとしている。あるいは、無理やり押し付けられているなどだ。そう考えると、自動販売機の内と外は、すなわち個人と社会でありその境界面は心の壁ともいえるものだろうか。手を接する行為は、社会との繋がりを求め、それを振り払うような動きは断絶を意味するように見えてきた。また、背後から押し付けられる様子は、平板な社会への適合を強要する行為を直接的に表現している。「挟まる人」が横方向の圧力を表現していたことに対して奥行き方向の力を表現している。「囚われる人」が映像と認識されにくい1つの原因は、触覚を表現している点にあるかもしれない。独特の表現なので、引き続き可能性を模索し作品として展開させたい。